

「環境」と「人」を未来へつなぐ

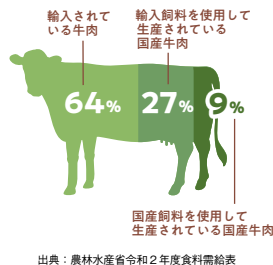
産直 はなゆき農場有機牛

北海道で大切に育てられた肉牛が、3月にコープデリ宅配に登場します。その名も「産直 はなゆき農場有機牛」。「環境」と「人」の両面を、未来のことを考えた取り組みです。



2つの課題に直面する日本の畜産業

私たちの食卓に並ぶお肉、「国産のもの」も多いですが、実はその餌も含めると国産はわずか、牛肉の場合9%。効率やコストを追求した結果、餌の大半を輸入に頼っています。



環境に配慮し自給力向上につなげる

日本で「有機」「オーガニック」として流通させるためには、厳しい認証基準をクリアしなければなりません。牛を育てる前から、農場の牧草には農薬を使用しないこと、有機栽培された餌を与え、ストレスなく牛を育てること。さまざまな管理をすべて記録し、有機JAS認証を受け肉牛として出荷するためには数年かかります。

その間、生産者には収入がないため、コープデリが子牛を購入して北十勝ファームに預けることで、負担を軽減しました。2018年から有機牛の取り組みをスタート、準備段階から一緒に取り組みを進めてきました。



有機牛の餌の一つ、有機しょうゆのしぼりかす。宅配で取り扱っている有機しょうゆメーカーをコープデリが紹介し、餌として確保できた。

持続可能な畜産業を目指す生産者との取り組み

コープデリは「未来へつなぐ」のもとSDGsの取り組みを進めており、生産者とともに持続可能な生

新しい生産者支援のかたち

コープデリでは、有機牛の取り組みを「若手生産者の支援」としても位置付けています。国内の生産者が高齢化する中、これからの担い手を応援することはとても大切です。有機牛を生産するため、北十勝ファームの一部門として「株式会社はなゆき農場」を任せられたのが、中村梢乃さん。埼玉県出身で、大学



農場で餌を与えながら、牛の健康状態をチェックする中村さん

産のあり方を考えてきました。その生産者の一人が、北十勝ファーム有限会社代表取締役 上田金穂さん。上田さんは15年ほど前から、餌はできるだけ地元北海道のものを使用、自家生産もしています。牛に牧草を食べさせ、その糞を堆肥化して牧草を育てる、循環型の畜産も行っていきます。また、なるべく牛にストレスを与えず自然のまま飼育するため、夏は広々とした農場に放牧、放牧中も一頭ずつ健康状態をチェックしており、スタッフが丁寧に牛に向き合っています。



「放牧での肥育に適した「日本短角種」という牛を飼育しています。和牛の一つで、赤身の味わいがおいしい品種です」と話す上田さん

2023年3月、ついに発売へ

こうして数年をかけて準備し、「環境」と「人」の両面を未来のことを考えた「産直 はなゆき農場有機牛」がついに発売されます。取り扱いは宅配の商品カタログ「VieNature」で数量限定での販売となりますが、組合員の皆さんが食べること、生産者への応援につながります。コープデリはこれからも、食の未来を考え、生産者への支援を続けます。



※画像はイメージです

Webでも「産直 はなゆき農場有機牛」をご紹介します! ※2月20日公開予定



未来へつなごう

コープデリグループは、事業と活動を通して「SDGs(持続可能な開発目標)」の達成を目指しています。



今回の取り組みは、目標12:

つくる責任 つかう責任
つながっています。

